
 学 会 記 事

第27回新潟画像医学研究会

日 時 平成4年6月27日(土)
午後2時～6時
会 場 新潟大学医学部 大講義室

演 題 1

1) 当科における経静脈性造影 CT 検査時の副作用の検討

高瀬 裕志・平山 昭平 (日本歯科大学新潟)
外山三智雄・二宮 秀一 (歯学部歯科放射線
江口 徹・前多 一雄 科)

近年、歯科領域でも CT 装置の普及が進み、歯科放射線科医が経静脈造影 CT を施行する機会も増えつつある。本検査は、歯科領域で行う他の造影検査と比較して、造影剤による副作用の発現頻度が高く、また、重篤な副作用の発現も予想される。そこで、造影剤による副作用について十分に検討しておく必要があると思われる。今回は、これまで当科で施行した経静脈造影 CT について、副作用の頻度、種類、処置とその予後を調べた。

対象は、1983年11月から1992年5月までに当科で経静脈造影 CT を行った 988 例で、造影剤はコンレイまたはオムニパーク 300 を使用した。造影剤の投与方法は、急速静注・点滴併用法を用いた。

結果は、当科における経静脈造影 CT 検査時の副作用は軽症の場合が多く、イオン性造影剤と比べ非イオン性造影剤では、副作用はさらに軽度となる傾向にあった。

2) 急性膵炎に合併した肝門部腫瘤性病変の

1 例

篠川 主・谷 達夫 (南部郷総合病院)
鵜飼 勉・佐藤 巖 外科
原田 武・八木 一芳
渋谷 隆・前田 裕伸 (同 内科)

急性膵炎症状を呈し CT で脾上縁から肝下面におよぶ腫瘤を認めた 1 例を提示した。症例は 69 歳、女性。胆嚢炎と高血圧の既往がある。家族歴では特記すべきことなし。平成 3 年 5 月 18 日夕食後上腹部痛、悪心、嘔吐出現し、5 月 20 日血清アミラーゼ：3278IU/L と上昇を指摘され急性膵炎の疑いで入院した。入院時 GOT, GPT,

LDH, ALP, γ -GTP, BUN, Cre の増加や尿蛋白も指摘された。ERCP では胆嚢の萎縮の他膵管の異常や膵胆管合流異常、結石はなく、Ga シンチでは肝両葉の腫大はあるが膵の異常集積はなかった。腹腔動脈撮影では脾動脈の不整像の他異常がなかった。CT では脾上縁から肝左葉下面におよぶ 6～7 cm の腫瘤を認め悪性リンパ腫が疑われた。平成 3 年 7 月 10 日開腹手術をしたが、同部には超母指頭大の壊死性の腫瘤しか認められず、病理学的にも良性で病因は不明であった。肝門部の病変は良悪性の鑑別、手術術式の決定上画像診断は極めて重要で今後も診断上注意すべき病変と考えられた。

3) 子宮平滑筋肉腫の 2 例

清野 泰之・安住利恵子 (長岡赤十字病院)
三浦 努 (放射線科)
須藤 寛人・安達 茂實 (同 産婦人科)

子宮肉腫の術前診断は困難であることが多い。この原因としては、ひとつには、症状・徴候が子宮筋腫のそれと類似していることであり、もうひとつには、腔部・頸管スメアが無効であることが多いことがあげられる。

今回我々の施設で、2 例の子宮平滑筋肉腫を経験し、術前の画像所見を検討することができた。MRI でも、信号のみからは、筋腫との鑑別が不可能であった。しかし、急速に増大する骨盤内腫瘍という臨床症状に加え、症例 1 では肺転移が見られ、症例 2 では、子宮と連続する細い茎を確認でき子宮肉腫と診断した。

画像診断は、病巣の進展度の把握や、腫瘍が子宮由来であることの確認に有効と考えられた。

4) CT による膀胱癌の示現と局所進展に関する検討

林 浩子・前田 春男 (新潟市民病院)
黒川 茂樹・横山 道夫 (放射線科)
大澤 哲雄 (同 泌尿器科)
渋谷 宏行 (同 病理)

平成 3 年 1 月より 4 年 3 月までの間に新潟市民病院泌尿器科に膀胱腫瘍で入院歴のある 27 名、のべ 44 CT 症例を検討した。前処置ではオリブ油注入法 24 例、造影剤希釈液注入法 14 例、前処置なし 6 例であった。それぞれ患者の体位、CT 画像上の腫瘍径、局在、局所壁進展を検討した。側壁病変は前処置の種類のいかに関わらず比較的小さな腫瘍まで描出れさたが、後壁病変は造影